定年退職の御挨拶

岩　堀　長　慶（数学教室）

東大教養学部の助手になったのが昭和24年11月で，以後10年程駒場生活をし，昭和34年に本郷の理学部に移り，27年の月日が夢のように速く流れ来月は定年退官の月となりました。理学部の皆様との思い出や外国に出張させて頂いた時の楽しかった思い出が次々に浮かんで来ります。昭和35年にプリンストンの研究所で２年の間，生れて始めて外国の生活というものを味わいました。物理の宮沢先生（当時新婚直後の）と知り合い楽しい会話を続けた思い出が未だ消えません。東大に帰り昭和40年に再びアメリカの群論学会（コロラド大学にて一ケ月），バークレイのカリフォルニア大

とパリ大，ノースイースタン大での講義に出張して42年に帰り，翌年から東大紛争が始まりました。たまたま教室主任で多忙となりましたが，この紛争のせいで他の教室の多くの先生方とも種々の話をする機会が得られました。理学部の先生方の個性というものも始めて知ることが出来，世間が広くなった思いもしました。学生達とも心を開いて話す状態が起こった様な気もします。ただ，数学を熱心にやっていたのは上述の昭和35年～42年だったと思います。新しい予想を思いつき，実験を繰返して，最後に証明まで確立できた喜びというものは一生のうちあまり度々は得られない――ということは紛争の頃から身にしみて実感しました。その後は学生指導の方により身をいれた様です。しかし驚いたのは学生の中にも何人か驚くべき才能の持主がいて，指導教官である筈の私より遥に実力が上であることが会うたびに明確になって行くことでした。特に若くして逝かれた新谷卓郎助教授の思い出は消えることがありません。性格は子供のような純粋さと人のよさとに満ち溢れていましたが抜群の才能は助手になった頃からすでに世界的に認められていました。年月が流れ，若い頃の大先輩の先生方はよその大学や研究所に移られ，教授会に出ても己れの過した年月の長さの実感と，若い活動的な諸先生の熱気を感じます　理学部から上智大学へ移ってもう暫らく教員生活を続けて行くことになりましたが，新世界へ行く楽しみと共に，人生の主要部分を過して来た理学部との別れの気持はいわば平家物語の始の部分を茫然と聞いているような気分です。若い頃夢中で過した理学部生活の楽しさ，外国で見て来た夢のような世界，学生達との論争を続けた紛争時代の夢中で送った月日，驚くような才能を持ちながら内気に話し掛ける学生達，そして気がついて見ると，教授や助教授となって活躍している姿から受ける感動――このような気持と共に長い間御世話になった理学部の諸先生方，事務の方々に心から御礼申し上げて御別れの挨拶とさせて頂きます。